ニューヨーク補習授業校だより

平成２７年度７月号
校　長　青木　正彦

＜　人生を変えた一言　数学編　＞

「算数が嫌いな人、手を挙げて。」忘れもしない。中学１年の初めての数学の授業。何人かが手を挙げた。私もその一人だった。すると先生の衝撃の一言、「良かったね。もう君たちが算数を勉強することはないから。」

「ミカンが2個しかないのに、3個食べることは、算数ではできません。2から3を引くことはできないので、答はゼロです。しかし数学はできます。答は－１個です。」

「今日から新しい科目である数学をやります。最初の授業です。ついてきてください。」

最初の授業は「加法」、算数でいう足し算の授業だった。数学ってやさしいんだな。これなら私でもできそうだ。私は算数が大の苦手だった。九九がうまく覚えられなかった。2分の1足す3分の1が、どうして6分の5になるのか、さっぱりわからなかった。鶴亀算、流水算など問題を見るのも嫌だった。

数学が算数と違うなら、一から頑張ってみようかと、その時、真剣に思った。今から思えば、前に戻ることではなかったので、やる気が湧いたのかもしれない。

そして、中学１年の夏休み、信じられないことが起こった。夏休みが始まってすぐに数学の宿題を終えたのだった。小学校時代は、夏休みが終わる直前まで、宿題に手をつけなかったのに。

それから、しばらくして、鶴亀算の問題をやったことがある。方程式を使ってあっという間に解けたのだった。うれしかった。数学に出会ってよかった。心からそう思った。算数の全くできなかった私の得意科目は、数学となった

＜　人生を変えた一言　体育編　＞

私は運動会が嫌いだった。かけっこはいつだってビリだった。小学6年生の時に、居残りになったことがある。逆上がりができなかったからだ。何度やってみても、できないものはできない。世の中は不

公平だ。足が速くて、かけっこがいつも1番で、簡単に逆上がりもできてしまう子がいるんだから。

中学1年の時の担任の先生は、体育の先生だった。大学時代は駅伝の選手だったと聞いている。どうしてそんな話になったのかは、覚えていないが、私は先生に質問した。

「先生、僕なんか、どんなに一生けん命走ったって、いつもビリ。そうかと思えば、楽に走っていつも一番の人って、いるんですよね。」すると先生の衝撃の一言、「一番で走る人が、一番頑張っているんだ。一番苦しんで走っているんだ。」

体育は準備運動から始まるというが、担任の先生は、よく私たちを走らせた。学校周辺を走るのだが、それが何より辛いことだった。それなのに、不思議だった。皆も苦しいのだとわかると、辛いことではなくなった。

最後まで走り切ろう。後ろから5番手を目指そう。後ろから10番手を目指そう。目標はどんどん上がっていった。やがて夏休みに入った。

私は走ることにした。走れば、苦しいことに変わりはない。しかし、うれしかった。自分でも、少しずつ足が速くなっていくことを実感できたのだ。

2学期が始まると、私は先頭集団の仲間入りを果たした。自分のデッドポイントを知った。呼吸を整えながら走ることも、ラストスパートも知った。

中学2年の最初の体育は、マット運動と鉄棒だった。できるはずのない逆上がりが、何と一発でできた。驚いた。うれしかった。走ることの苦手な、逆上がりのできなかった私の得意科目に、体育も加わった。

「中学で、自分の人生が変わった。」というお話をよく聞きます。私もそのお仲間の一人です。人は、大きな環境の変化があると、その波に乗って、変わりたいと思うものなのでしょうか。振り返ると、夏休みも、環境の変化だったように思います。夏休みは、自分の自由になる時間が増えます。そこで、どう過ごすかで、その後の人生が変わってくるのではないでしょうか。皆さん、夏休みをお大切に。